

アショー・チン語の所有表現における声調交替

大塚 行誠

(独) 日本学術振興会特別研究員 (PD)

mrkosei@gmail.com

キーワード: チベット・ビルマ語派, チン語支, アショー・チン語, ミャンマー, ヤンゴン

0. 本論文の目的

本論文では、アショー・チン語の所有表現に焦点を当て、人称助詞、人称代名詞、その他の名詞句で所有者を表す場合について述べる。そして、一部の被所有物を表す句において声調が交替することを指摘する。

1. 使用地域と話者人口

アショー・チン語 (Asho Chin, ISO 639-3: csh) は、シナ・チベット語族チベット・ビルマ語派チン語支の南部チン語群に属する (西田 1989, Bradley 1997)。アショー・チン語を母語とする人々のコミュニティは、ミャンマー連邦共和国南西部のエーヤワディー・デルタやアラカン山脈南端部、バングラデシュの東部に広く点在する (Bernot & Bernot 1958)。ミャンマー国内では「平地チン族 (Plain Chin)」とも呼ばれる。

SIL International の報告によると、2011年の時点でミャンマー側に約 30,000 人、バングラデシュ側には約 4,000 人の話者が

いる。先行文献と筆者によるインフォーマントへの聞き取り調査をもとに、ミャンマーにおけるアショー・チン語の使用地域を図 1 に示す。なお、本論文で考察の対象とする言語は、ミャンマー連邦共和国ヤンゴン市インsein地区におけるアショー・チン語である。



図 1 アショー・チン語の使用地域
(該当の地域内に話者コミュニティが点在)

2. 先行文献

アショー・チン語の言語学的な資料には、Fryer (1875) によるタンドゥエ方言の言語資料、Houghton (1892, 1895) によるミンブー方言の簡単な記述、そして Grierson (1904: 331-346) による言語の概略がある。どの資料もラテン文字による独自の表記法で記述しており、本論文で扱うヤンゴンにおけるアショー・チン語とは若干異なる。

3. 本論文のデータ

筆者は、2012年7月から2014年9月にわたり、合計約4か月間の断続的な調査を行った。主な調査地点はヤンゴン市インセイン地区のアショー・チン・バプティスト教会 (Asho Chin Baptist Church) であり、調査協力者はヤンゴン市出身のアショー・チン語話者 Salai Kyaw Htwe Hercule 氏 (1962年7月生まれの男性) である。

4. 音韻体系

音節構造は C (C) V (V) (C) /T である。C は子音、V は母音、そして /T は音節全体にかぶさる声調を示す。なお、このセクションに限り、音素表記を / / で囲んで記す。

子音は /p, p^h, b, t, t^h, d, k, k^h, g, ʔ, m, hm [mm], n, hn [nn], ɲ, hɲ [ɲɲ], ŋ, hŋ [ŋŋ], β, d', s, s^h, z, h, f, ɛ, w, r [ɹ], y [j], l, hl [ll], c [tɕ], c^h [tɕ^h], j [dʒ]/, 母音は /i, ɪ, e [e(ɪ)], ɛ, a [a ~ a], ə [ə(ɐ) ~ ɤ(ɐ)], ɔ, o, ɔ, u, ai [ai], aɔ [aɔ]/ である。

声調素には低声調 /' / と高声調 /' / がある。ただし、一部の音節では下降のピッチも見られる。本論文ではこの下降のピッチを低声調の異調として扱う。

なお、大塚 (2014) では声調を持たない音節、すなわち軽声音節 (atonic syllable) の存在を示唆した。この分析は話者の間で広く使われるアショー・チン文字の綴りに影響を受けたものである。超短音 /ǎ/ [ǎ] の含まれる開音節を軽声音節と呼んでいる。

一部の語と後述の声調交替を記述するには、上述の軽声音節と見られる音節でも高低を区別して書き表す必要がある。例えば、例 (1) の /p^hǎ/ では高低の区別が曖昧であり、軽声音節と言えるが、例 (2) と (3) の /pǎ/ には明らかなピッチの差が見られる。

(1) /p^hǎyò/ [p^ha˩jɔ˩] または [p^ha˩jɔ˩] 「ねずみ」

(2) /pǎlǎɪN/ [pa˩lǎi˩] 「瓶」

(3) /pǎlò/ [pa˩lo˩] 「笛」

ただし、現調査段階ではこのピッチの高低に関するミニマルペアは見つかっていない。この種の音節に関する詳細な分析は今後の課題とし、本論文では暫定的に低いピッチを /ǎ/ (低声調に相当)、高いピッチを /ǎ' / (高声調に相当) と記し、考察を進めていく。

5. 所有表現に関する考察

アショー・チン語には、所有者を示す文法的な形態素や被所有物を示す文法的な形態素は無い。所有者を表す語や句の後に被所有物を表す句を置くことで所有の関係を示す。

所有者を表す語の部分には、人称助詞または人称代名詞が現れる場合もある。アショー・チン語で人称と数を表すには人称代名詞（表 1 参照）または人称助詞（表 2 参照）を用いる¹。

表 1 人称代名詞

	SG	PL
1	<i>cè</i>	<i>cámè</i> (EXC) <i>ʔámè</i> (INC)
2	<i>nàɔN</i>	<i>nàɔnmè</i>
3	<i>pʰò/yàʔ</i>	<i>pʰòmè/yàʔmè/nǎhè</i>

表 2 人称助詞

	他動詞		自動詞	
	SG	PL	SG	PL
1	<i>kǎ=</i>	<i>(kǎ=)mǎ=</i>	<i>kǎ=</i>	<i>(kǎ=)mǎ=</i>
2	<i>nǎ=</i>	<i>mǎ=</i>	<i>nǎ=</i>	<i>mǎ=</i>
3	<i>ʔǎ=</i>	<i>mǎ=</i>	無し	無し

以下、所有者を人称助詞 (§5.1)、人称代名詞 (§5.2)、その他の名詞句 (§5.3) で表す場合について述べる。

5.1 人称助詞を用いた所有表現

人称助詞（表 2 参照）は動詞句の前に付加すると、主語の人称と数を表す。単数形の人称助詞を名詞句の前に付加すると、所有者の人称を示す（例 (4) 参照）。

(4) *kǎ=zóʔzǎN*

1=forehead

「私の額」

しかし、所有者が複数いる場合、人称助詞で所有者の人称を示すことはできず、人称代

¹ 人称代名詞と人称助詞には双数形もあるが、現調査段階では、語用の面によく分からない点が多い為、本論文の記述の対象から外す。双数形の人称代名詞：*cèhní / cǎmèhní* (1DU); *nàɔnhní / nǎɔnmèhní* (2DU); *yàʔhní / yàʔmèhní / pʰòhní / pʰòmèhní / nǎhwè / nǎhwèhní* (3DU)、双数形の人称助詞：*nǎ= / =hwè* (DU)

名詞で所有者の人称を示す (例 (5) b. 参照)。

(5) a. * *kǎ=mǎ=zóʔzǎN*

1=PL=forehead

b. *cǎmè zóʔzǎN*

1PL.EXC forehead

「私たちの額」

なお、人称助詞で所有者の人称が示せる被所有物は限られる。被所有物が身体部位² (例 (6) 参照), 分泌液³ (例 (7) 参照), 属性⁴ (例 (8) 参照), 位置⁵ (例 (9) 参照) を表す場合, そして一部の親族名称 (例 (10) 参照) である場合に人称助詞を用いて所有者の人称を示すことが出来る。これらのうち, 単音節から成り立つ名詞の多くは, 単独では名詞接頭辞 *ʔǎ-*⁶ を伴うが, 人称助詞の付加によって省略される (例 (8), (9), (10) 参照)。

(6) *ʔǎ=hàσʔkʰó*

3=mouth

「彼の口⁷」

(7) *nǎ=míʔkʰí*

2=tear

「あなたの涙」

(8) *kǎ=sʰáσʔ*

1=age

「私の歳」 (*ʔǎ-sʰáσʔ* 「歳」)

² *ʔǎ-ló* 「頭」, *ʔǎ-míʔ* 「目」, *míʔkʰóhmò* 「眉毛」, *hnàʔtʰó* 「鼻」, *hnǎgàσN* 「耳」, *mónsʰón* 「唇」, *ʔǎ-hó* 「歯」, *kʰótó* 「顎」, *kʰótóhmò* 「顎髭」, *hmwázǎN* 「顔」, *bǎhé* 「頬」, *ʔǎ-kúʔ* 「手」など。また, *hnǎtʰón* 「耳飾り」や *lòkʰó* 「帽子」など, 一部の装飾品も人称助詞で所有者を表すことができるが, *míʔhmán* 「眼鏡」など, 出来ないものもある。

³ *zóʔtwì* 「唾」, *ʔǎ-kʰòʔ* 「汗」, *ʔǎ-hnòʔ* 「鼻水」など。また, *ʔǎ-éó* 「息」や *ʔǎ-sʰán* 「声」など身体から発せられるものも人称助詞で所有者を表すことができる。

⁴ *ʔǎ-mín* 「名前」など。

⁵ *ʔǎ-hnò* 「後ろ」, *hmòngón* 「前」, *ʔǎ-hón* 「上」, *ʔǎ-sʰwì* 「上」, *ʔǎ-kò* 「下」, *lǎʔpán* 「右」, *cʰétòn* 「左」など。

⁶ 現調査段階では, この接頭辞 *ʔǎ-* の主要な機能については不明である。ただし, 主に身体部位, 親族名称, 位置を表す名詞など, 話し手との関係が示されるもので, かつ一音節から成る名詞に付く傾向がある。グロスでは A- と記す。

⁷ ただし, ふつうは人称代名詞 *pʰò* (3SG) を用いて所有者を表す方が圧倒的に多い。

(9) *nǎ̀=sàiN*

2=vicinity

「あなたの近く」 (*ʔǎ̀-sàiN* 「近く」)

(10) *kǎ̀=pà*

1=father

「私の父」 (*ʔǎ̀-pà* 「父」)

人称助詞で所有者の人称を示すことのできないものもある。特に、ビルマ語からの借用語には人称助詞で所有者の人称が示せないものが多い (例 (11), (12) 参照)。

(11) a. *cè nári*

1SG watch:BUR

b.**kǎ̀=nàri*

1=watch:BUR

「私の時計⁸」

(12) a. *cè pónbi*

1SG trousers:BUR

b.**kǎ̀=ponbi*

1=trousers:BUR

「私のズボン⁹」

以上、大まかな傾向を述べたが、人称助詞を用いた所有表現は人称代名詞を用いた所有表現に比べ、生産性が圧倒的に低い。なお、ビルマ語からの借用語の中にも、人称助詞で所有者の人称を示すことのできるものがある (例 (13) 参照) 一方、親族名称の中にも、人称助詞で所有者の人称を示すことのできないものがある (例 (14) 参照)。

(13) *kǎ̀=kaʔcè*

1=scissors:BUR

「私のはさみ¹⁰」

⁸ ビルマ語 နာရီ /naji/ 「時計」 (大野 2000: 316) からの借用語。

⁹ ビルマ語 ဘောင်းဘီ /baun:bi/ 「ズボン」 (大野 2000: 464) からの借用語。

¹⁰ ビルマ語 ကပ်ကြေး /kaʔtʃi/ 「はさみ」 (大野 2000: 33) からの借用語。

(14) *kǎ=ʔàσʔʔó

1=mother

「私の母」

一部の名詞では、慣用句として人称助詞で所有者の人称を示すこともある（例 (15), (16) 参照）。人称助詞で所有者の人称を示すことができるか否かは、話者によって判断が異なりとインフォーマントは指摘している。少なくとも、人称助詞を用いた所有表現は人称代名詞の場合に比べ、生産性が低いと言える。

(15) kǎ=sín+sʰàσ

1=knife+long

「我が長刀」

(16) kǎ=dâiʔ

1=land

「我が土地」

5.2 人称代名詞を用いた所有表現

表 1 の人称代名詞で所有者の人称を示す場合、被所有物を表す名詞句の前に人称代名詞を置く（例 (17), (18) 参照）。

(17) cè hó

1SG tooth

「私の歯」

(18) nàσnmè bó

2PL meal

「あなたたちのご飯」

被所有物を表す名詞句の初頭音節が低声調（低いピッチ）である場合、声調交替が起こり、高声調（高いピッチ）となる（例 (19), (20) 参照）。

(19) pʰò háσʔkʰó

3SG mouth.POSS

「彼の歯」 (háσʔkʰó 「歯」)

- (20) *cè* *ʔiN*
 1SG house.POSS
 「私の家」 (*ʔiN* 「家」)

5.3 その他の名詞句を用いた所有表現

その他の名詞句を用いて所有者を表す場合でも、被所有物を表す名詞句の前に所有者名詞句を置く (例 (21) a. 参照)。ただし、所有者名詞句を前置する場合、名詞接頭辞 *ʔá-* はしばしば省略される (例 (21) b. 参照)。

- (21) a. *tʰùnhláiN* *ʔá-sʰòN*
 PN A-hair
 b. *tʰùnhláiN* *sʰòN*
 PN hair
 「トゥンフラインの髪」

所有者を表す名詞句の末尾音節が低声調であり、かつ被所有物を表す名詞句の初頭音節が低声調である場合、声調交替が起こり、被所有物を表す名詞句の初頭音節は高声調 (高いピッチ) になる (例 (22), (23), (24) 参照)。

- (22) a. *cótʰwè* *ʔá-sʰòN*
 PN A.POSS-head
 b. *cótʰwè* *sʰòN*
 PN head.POSS
 「チョートウエーの髪」 (*ʔá-sʰòN* 「髪」)

- (23) *cótʰwè* *lòkʰó*
 PN hat.POSS
 「チョートウエーの帽子」 (*lòkʰó* 「帽子」)

- (24) *máʔnsòʔ* *báʰé*
 PN cheek.POSS
 「マウンスッの頬」 (*báʰé* 「頬」)

所有表現以外においても、名詞と名詞からなる複合名詞にこの種の声調交替が見られる場合がある (例(25),(26) 参照)。ただし、複合名詞で必ずしも声調交替が起こるわけではない (例(27) 参照)。今後、更なる詳細な調査が必要である。

(25) a. *s^hú+zò?*

cow+child

b. *s^hú+zàσ*

cow+child

「子牛」

(26) a. *hnǎ̀tò+zó?*

woman+child.POSS

b. *hnǎ̀tò+zàσ*

woman+child.POSS

「少女」(zò? 「子」, zàσ 「子」)

(27) *k^hótà+hmò*

chin+hair

「あごひげ」(*hmò* 「ひげ」)

軽声音節と見られる音節でもしばしば高低の区別があると §4. で指摘した。これまでに述べた声調交替を明確に記述する上では高低の区別が必要である。以下、短母音 *ǎ* を含む音節のピッチの違いにより、文の表す意味が異なる例を(28) と(29) に示す。

(28) a. *máíὲèN s^hǎ́mó =bǎ́dǎ́*

PN teacher =FIN

「マイシェーンは先生です。」

b. *máíὲèN s^hǎ́mó =bǎ́dǎ́*

PN teacher.POSS =FIN

「マイシェーンの先生です。」

(29) a. *ní=gò? pyè?p^hyà ʔǎ́-hnó? =mà*

DEM=PP PL A.POSS-nose =Q

「これは、ピエーピョーの鼻か？」

b. *pyè?p^hyà ʔǎ́-hnó? sí=fî?*

PN A-nose go=3.REAL

「ピエーピョーは、鼻水が出ている。」

6. まとめ

本論文では、アショー・チン語における所有表現の概略を述べた後、所有表現に見られる声調交替について述べた。

本論文では主に人称助詞、人称代名詞、その他の名詞句による所有者標示について述べ、このうち人称助詞で所有者の人称を示す方法は生産性が低いと §5.1 で指摘した。一方、北部チン語群のティディム・チン語や中部チン語群のミゾ語では生産性が極めて高く、アショー・チン語とは異なる様相を見せている（例(30) 参照）。

(30) a. ティディム・チン語（北部チン語群）の例「私の犬」

kà=úi

1=dog

b. ミゾ語（中部チン語群）の例「私の犬」(Chhangte 1993: 66)

ka-úy

1-dog

c.? アショー・チン語（中部チン語群）の例「私の犬」

kǎ=wì

1=dog

（ただし、インフォーマント自身はめったに使わないとコメントしている。）

さらに、所有表現に見られる声調交替についても述べた。所有者名詞句の末尾の音節が低声調であり、かつ被所有物を表す名詞句の初頭音節が低声調である場合、被所有物を表す名詞句の初頭音節の低声調（低いピッチ）は高声調（高いピッチ）に交替する。

チン語支の他の言語を見てみると、所有表現で声調交替の起こる言語もある。例えば、北部チン語群のティディム・チン語における所有表現においても声調交替が見られる。しかし、被所有物を表す名詞句ではなく、所有者を表す名詞句で声調が交替する点でアショー・チン語とは異なる（例 (31) 参照）。

(31) a. *hà:ugòu*

PN

「ハーウゴウ」

b. *hà:ugou* *úi*

PN.POSSESSOR dog

「ハーウゴウの犬」(Henderson 1965: 71)

今後は複合語における声調交替も視野に入れ、考察をさらに深めていく必要がある。

略号

1: first person, 2: second person, 3: third person, *: ungrammatical, -: affix boundary, =: clitic boundary, +: compound boundary, A: prefix ʔă-, BUR: loan word from Burmese, DEM: demonstrative, EXC: exclusive, FIN: final particle, INC: inclusive, PL: plural, PN: proper noun, POSS: possessee, PP: pragmatic particle, Q: question, REAL: realis, SG: singular.

参考文献

- Bernot, Denise and Lucien Bernot (1958) *Les Khyang des collines de Chittagong (Pakistan oriental): matériaux pour l'étude linguistique des Chin*. (L'Homme, Cahiers d'Ethnologie, de Géographie et de Linguistique, Nouvelle Série, 3.) Paris: Librairie Plon.
- Bradley, David (1997) Tibeto-Burman languages and classification. In: David Bradley (ed.) *Tibeto-Burman Languages of the Himalayas* 14: 1-72.
- Chhange, Lalnunthangi (1993) Mizo Syntax. Ph.D. dissertation, University of Oregon.
- Fryer, G. E. (1875) On the Khyeng people of the Sandoway District, Arakan. *Journal of the Asiatic Society of Bengal* 44: 39-82.
- Grierson, George A. (1904) Tibeto-Burman family, Specimens of the Kuki-Chin and Burma groups. *Linguistic survey of India* 3(3). Calcutta: Office of the Superintendent of Government Printing.
- Henderson, Eugénie J. A. (1965) *Tiddim Chin, A Descriptive Analysis of Two Texts*. London: Oxford University Press.
- Houghton, Bernard (1892) *Essay on the Language of the Southern Chins (Asho) and Its Affinities*. Rangoon: Superintendent Government Printing.
- _____ (1895) Southern Chin Vocabulary (Minbu District). *Journal of the Asiatic Society* 27(4): 723-737.
- 西田龍雄 (1989) 「チン語支」 亀井孝 ; 河野六郎 ; 千野栄一 (編) 『言語学大辞典 世界言語編 (中)』 2: 995-1008. 東京 : 三省堂.
- 大野徹 (2000) 「ビルマ(ミャンマー)語辞典」東京: 大学書林
- 大塚行誠 (2014) 「アショー・チン語における人称標示と inverse marker mǎ-」 『第 148 回日本言語学会大会予稿集』 260-265.
- SIL (Summer Institute of Linguistics) *International Chin, Asho / Ethnologue*.
<http://www.ethnologue.com/language/csh> (accessed 2014-8-25)

Tone alternation in possessive expressions in A sho Chin

Kosei OTSUKA

The language of an ethnic minority in Myanmar, A sho Chin belongs to the Kuki-Chin subgroup of Tibeto-Burman languages. Since no morphologically overt marker exists to signify possession in A sho Chin, nominal possession is generally indicated by the simple juxtaposition of the two nominals without any grammatical marker. This paper argues that tone alternation occurs in the possessee noun phrases under certain conditions.